

深い研究対象であることを知ることができた。本書で論じられている医学部設置問題、あるいは理科専門学校設立にかかわる動向、アメリカ研究所をめぐる問題などには、当時の政策遂行・国家権力の内部に（ある意味当然ではあるが）利害対立関係が存在したことが示唆されている。立教学院は、対立を浮かび上がらせる（国家権力が「一枚岩の抑圧者ではなかった」ことを正確に描き出すことのできる）研究対象としても可能性をもっているように思われたのである。

そしてなによりも、現在の日本の高等教育がおかれた状況のなかで、戦時中の自校の責任とはたすべき義務を自覚し、それを実際の研究成果として世に問うことで、研究機関としての「基礎体力」を示したことには、きわめて大きな価値がある、と評者は考える。

*本稿は、『立教大学教育学科年報』（第五二号 二〇〇九年三月）に掲載された拙稿（図書紹介）に大幅に加筆して書評としての体裁を整えたものである。掲載を認めていただいた前田一男学院史資料センター長はじめ関係者の皆様から御礼を申し上げます。

『日本聖公会

— ポール・ラッシュュ報告書 —

春日 隆

この度、『THE EPISCOPAL CHURCH IN JAPAN』の翻訳を立教大学出版会から出版されました。上記文書の存在は五〇年以前から知られていましたが、翻訳はなされませんでした。その理由の一つとして、資料として用いる方は多くの場合、英語原文の読解に不自由が無かったからです。そのため一部の人を除いて、内容を十分に知っている人は稀でした。

十年以前には、英語原文の完本が無くなり、所有者の違う幾つかの残頁を組み合わせれば、ようやく完本となるという状況になりました。今回の翻訳も当初はそうしたものを底本にしたものでした。その後、日本聖公会管区事務所と同横浜教区から完本が発見され、本書はそれらを反映させています。

内容は、日本の敗戦後四年目、一九四八年一月一日時の日本聖公会の関係する全組織の現況報告書です。その目的は米国聖公会総裁主教代理のペントレー師への報

告と、米国聖公会の週刊誌「リビング・チャーチ」誌への掲載を企図して、戦後の日本聖公会についての報告として編集されたものです。本「報告書」から往時の日本聖公会を復元しようとする、触れられていない部分があることが分かります。その成立を見ますと、「日本聖公会婦人補助会」の働きは記録されていないなどから見て、資料を提出する日本聖公会の側の姿勢としては、当時のGHQ（実際にはポール・ラッシュ個人の関心事の性格が濃かったのですが）から要求された項目についてのみ忠実に応えた報告書ということが、推測されます。しかし、当時としては日本聖公会全体を把握した資料はありませんので第一級の資料であることは違いありません。また、驚くべきことには戦争中末期に分裂してしまった日本聖公会という教派がこんなに早く回復していたことはこの報告書による以外は知ることは出来ません。

第一章「日本における聖公会」のはじめの部分にある短文集において、昨日まで敵国であった日本の教会に対するシンパシーをもとめるに十分な顔ぶれによる文章を保持ってきています。機を見るに敏と言わざるを得ません。それにより、連合軍総司令官ダグラス・マッカーサーの日本占領方針を知ることの入り口となります。一九四五年秋、戦後日本の調査団を率いていた進歩的な世界教会協議会米国委員会を代表するダグラス・ホートン博士の

「日本人の精神的空白を埋めて、民主的として立ち直り、世界の国から受け容れられるにはキリスト教によるしかない」との結論は占領政策と方向を一にする結果になることなどの切っ掛けを見つけることとなります。当時の文部大臣田中耕太郎氏はキリスト者であり戦中戦後を一貫して「反共」提唱していたことで知られ、米国にとっては好ましい人物でした。彼は「教育基本法」の起草者でもありました。このように、本「報告書」の数行が取り掛かりとなり、多方面の研究を進めることになると思えます。

今回の翻訳出版をどのように評価するかについては、そのひとの関心により大きく開きます。日本聖公会というキリスト教の一教派にとってのみ歴史的に、また現在の諸活動の原点を振り返る資料として価値があるのか、あるいは戦後日本という角度から価値を認めるかということです。

今回の翻訳出版にて、英語読解の努力無しに読めることになりました。今までは研究者も少なかったのですが、多くの人にそうした場を与えたこととなります。これらが研究の対象となる幕開けといえます。

わたくしは、著者ポール・ラッシュの愛した山梨県の清里聖アンデレ教会の四代目牧師兼キープ協会チャプレンを一〇年勤めました。その最初の仕事が氏の葬送式の

補式でした。

死後、多くの宣教師・聖職がお宝を遺して行くのですが、氏は記念品として貰った物以外はこれといってありませんでした。そのように、氏はその生涯を自分のためではなく、日本の将来のためにだけ生きたと言い得ます。

氏は米国人でありましたから、「反共」というように母国にも忠実でしたでしょうが、関東大震災の復興に努力したときと同様、敗戦後の日本の復興と進歩にも並々ならぬ努力を惜しまなかった人物でした。そのことは本書の補遺「日本聖公会の復興及び前進に対するプログラム」および立教学院史資料センター研究員・豊田雅幸氏の解説「ポール・ラッシュ報告と立教学院」、同センター学術調査員・研究員・大江 満氏の「ポール・ラッシュ報告書と日本聖公会」により短く纏められています。本「報告書」が単に一教派のため、とその関係内だけでは

なく、その向こうの日本全体を、照らし出していることを読み取ることが出来ます。是非多くの方々が手になさることをお勧めいたします。

前述のように本書の出版を通して、「THE EPISCOPAL CHURCH IN JAPAN」及び「日本聖公会の復興及び前進に対するプログラム」「THE PROGRAMME FOR THE RECONSTRUCTION AND ADVANCE OF THE NIPPON SEIKOKWAI」の完全原本が横浜教区資料室にあることが判明しました。しかし、粗悪な紙質のため劣化が進んでいました。協議の上、立教学院史資料センターに永久寄託され同センターにより修復し、完全保存・管理されることとなりました。今後の改訂版はさらなる新発掘の資料によって読み取り不可能によって欠字となっている部分が埋められるでしょう。各教会関係資料室、個人の所有による文献の寄託も考慮する手始めとしての今回の寄託でした。